■リーダーズ・ナウ［卒業生インタビュー］

LEADERS NOW!

地域の水環境を守る！

QOLの基本となる水に向き合う

◉吹田市環境部環境保全指導課
藤原 明日香 さん
―環境都市工学部エネルギー・環境工学科
（現エネルギー環境・化学工学科）2018年卒業―

「学んできたことを生かせる仕事がしたい」。就職活動時に藤原さんが最もこだわったポイントだ。そこで、関心を持って学んできた環境保全に関わる就職先を探すなかで出合ったのが吹田市職員。学習・研究内容を要件とする採用枠（環境コース）で入庁した。そして今、大学生活を過ごした吹田で、水と向き合う毎日を送っている。

藤原 明日香――ふじわら あすか
■1995年大阪府生まれ。大阪府立岸和田高等学校卒業、2018年関西大学環境都市工学部エネルギー・環境工学科卒業。同年吹田市職員（環境コース）として入庁。2023年4月現在、環境保全指導課に勤務。趣味はストレッチ、読書、旅行、ダンス。

◉年に数回は母校をチェック

「卒業後も実は年に数回は関西大学を訪れています」。藤原さんが現在所属しているのは、吹田市環境部環境保全指導課。企業や大学などからの排水に関する規制や届出指導を担当している。「有害な物質を取り扱う事業所に立入検査をして、排水が地下に浸透することがないか、規制基準値は守られているかなどを調べます」。吹田市内の教育研究機関でもある関西大学もその立入検査対象になっており、担当者である藤原さんは母校をチェックしているというわけだ。

立入検査対象となる事業所は市内で100近くにのぼるが、「主に有害物質を使用していたり、排水量が多いといった環境への影響が大きい事業所の立入検査を行います。環境汚染は一度起こってしまうと元の状態に戻すことが大変であり、未然に防ぐことが重要という思いで仕事にあたっています」。

立入検査は、1事業所につき30分～1時間。決められた手順に沿って採水し、持ち帰って分析を依頼し、結果を評価している。必要に応じて行政指導を行い、改善を促している。「吹田市内の事業所は、そもそも有害物質を流さないように、産業廃棄物として処理するなど、環境保全に対する高い意識をもって排水処理に取り組んでおられます」と、藤原さんは目を細める。

◉水環境はQOLを左右する

立入検査は抜き打ちだからこそ、ハプニングも少なくない。例えば、採水予定地にたまたま水が流れていなかったり、工場自体が稼働していなかったりすることもある。そうなると別の日に出直す、もしくは、水が流れている箇所を探し回らなければならない。「大変なのはマンホールを持ち上げることぐらい」と言うが、「川で魚が死んでいる」「川がいつもより汚れている」のように、環境汚染が疑われる通報にも迅速に駆け付けて対応する藤原さんたちの仕事は、極めて重要だ。

以前は、下水道部水再生室に所属していた藤原さん。「下水処理場での勤務で、処理場の水質管理や下水道へ排水する事業所の規制業務に従事していました」。まじめで快活な仕事ぶりが評価されて、ケーブルテレビの取材で処理場の案内役を務めたこともある。「水環境を守る業務にやりがいを感じる」と藤原さんは語る。「今は住む人にとって地域の川や水路の水がきれいなのが、当たり前と考えられる時代。なので、川や水路の水が汚れると、まちの環境が悪くなり、QOLは格段に下がります」。人が生き、暮らしていくために必要な水。その供給源が悪化すればどうなるかは自明のこと。「当たり前にある安全な水環境を当たり前に守ることが、私たちの仕事なんです」。

◉助け合いながら、楽しみながら学んだ４年間

「休日に街を歩いていても、ついついマンホールを見てしまう」と笑う藤原さんが、環境問題を意識したのは高校生の時。教科書に載っていた写真に目を見張った。「海外で水が枯渇してひび割れる地面や進行する砂漠化が、遠い国のことには思えなかった」。数学や理科が好きだったこともあり、理系の視点から環境について学べる大学を探して、関西大学にたどり着いた。

▲卒業研究で指導を受けた林順一教授と

「実験に実験を重ねる日々は大変でした」。理系学生の宿命とも言える実験や実習に追われながらも、藤原さんは充実のキャンパスライフを過ごした。卒業論文は『バイオマス炭化物の水蒸気吸着量と水蒸気吸着速度の評価』。安価で大量に調達できる廃棄物から優れた調質材が発見できれば、食品廃棄物削減にも繋がり、経済的ではないかと考えた。素材は、バナナの皮や穀物のもみ殻など数種類。それらを酸素が少ない状態で加熱処理し熱分解することにより、多孔質の炭化物を作成する。作成した数種類の炭化物について、どれほどの水蒸気が吸着し、どれが優位性を発揮するのかを丹念に調べ上げた。

▲研究室の仲間たちと卒業式で記念撮影

「ひたすら仲間と助け合った4年間でした」と大学生活を振り返る。「同じ学科のみんなとは入学から卒業まで大学にいる時はほぼ一日中一緒でした。だから、課題でも研究でも、分からないことがあれば同じ学科、同じ研究室の友人に質問していました」。逆も然りで、頼り頼られる関係が自身の成長につながった。当時の友人とは今も交流があり、その活躍ぶりに刺激をもらっているという。また、何事も楽しんだもん勝ちという自身の性分が、大学生活をポジティブにしたとも語る。「長時間立ちっぱなしになる実験中でも、友だちと結果に一喜一憂し合ったり、おしゃべりしたり」。そんな人とのつながりを大切にする気持ちと、楽しむ姿勢は、社会人になっても大切にしている。「同じ課内はもちろん、他部署とも連携しなければ水環境の保全はかないませんし、主体的に取り組むためには楽しまないと！」。

◉止まらない探究心と挑戦

入庁から5年が経ち、後進を指導する立場にもなりつつあるが、そこには理系思考が息づく。「仕事の目的をきちんと伝えるようにしています」。任せる計算や分析を断片的にではなく、全体像やゴールを明確にしたうえで指導するのが藤原流だ。「そもそも公式やルールに基づいて物事を探求することが好きなんです。その中で、想定どおりの結果が出ることもあれば、想定外の結果に出合うこともあり、そんな時は探究心が芽生えます。公務員の仕事も法律や条例というルールに沿って進めるせいか、きっと自分の性に合っていると思います。」。職場の上司も「藤原さんは何事もまず自分で考えて、実行するという姿勢が素晴らしい。日々成長する姿を見ていると、とても心強い存在」と評価する。

「将来は市民の皆さんが楽しめるまちなかリビングのようなコミュニティ施設づくりに関われたらいいですね」。人とのつながりと楽しむ気持ちを大切にする藤原さんの今後の夢は、市民がふれあうことができる憩いの場を設けること。当たり前に水を守るように、その夢もまた当たり前にかなえてしまうのかもしれない。